

そんでいたのだが、今はすっかり整備されてしまったよ。

◆ お店の人（雑貨店）

たくさん人がくるようになってから少しはもうかっている。しかし、発電所があると恐ろしいよ。

◆ 漁師のおじさん

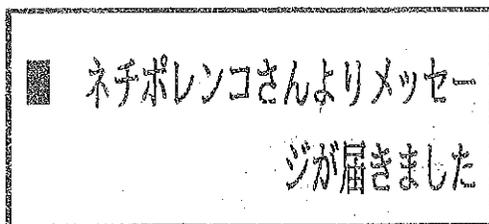
夏になると、近くで赤潮が発生するんだ。あったらあったで恐ろしいし、なかったら困る……。

というようなものです。実際に取材に行った子供は、「みんなの理解と知ることが必要だと思った」と感想を書いています。確かにその通りだと思います。事実をいかに知るのか。また、知らせるのが、今一番求められています。ただ、現地に住んでいれば、知りたくないという思いが強いというのも理解できます。あとで触れますが、玄海一号機の現状を一人でも多くの人に知ってもらいたいと思います。

さて、こうしたいろいろな問題に取り組んだ子供たちが、「私たちの地球」というテーマで、合唱組曲を作りました。その一つに「八本足の子馬」という曲があります。もちろんチェルノブイリ原発事故をテーマにしたものです。二年前、チェルノブイリの被害の実態が、初めてソ連政府から公の形で発表されました。その時私たちが目のあたりにしたのが沢山の動物の奇形の写真であり、八本足の子馬の写真もその一つでした。自らの足で大地の暖かさを踏みしめることもなく、生まれて間もなく死んでいった一頭の子

馬に、生命の尊さ、自然のすばらしさ、放射能の恐さを重ね合わせています。とても中学生の子供たちが作ったとは思われない（失礼）すばらしい作品です。この歌声をチェルノブイリの子供たちにも届けようとテープと文集をベラルーシのチェルノブイリ同盟白ロシアのヤコベンコ議長まで送りました。ヤコベンコさんから「受け取った」という連絡がまだ入っていないのは残念ですが、届き次第、歌を聴いての感想やベラルーシの現状を伝えてもらうことになっています。

尚、「八本足の子馬」の楽譜の必要な方は連絡ください。



昨年末に宮崎から一人、旅行を兼ねてモスクワ、ジトミールを訪問しました。折角だからジトミールにも立ち寄り、私たちが訪問したところを再度訪ねてみたいということで、ピースニック新聞社に受け入れのお願いをしました。その時の様子がビデオに収められています。取りあえず、「ジトミールスキー・ピースニック新聞社」編集長のネチポレンコさんのメッセージだけを翻訳しました。その他ビデオには、子供総合病院の様子や事故の時実際に消火作業にあたった消防士の話、街角の人々の話が収録されています。未編集ですが何本かダビングしてありますので、見てみたい方は、宮崎の青木さんまで申し込んでください。

(☎ 0985・28・2587) 青木

☆ 九州の皆様へ!

まず、日本の皆さんにチェルノブイリについての関心を持っていただき感謝しています。ここウクライナでは最近、それに対する関心が薄れてきています。そこには人々が住み、子供たちが住み、子供も生まれています。私たちの地区（ジトミール州）では高汚染地区からの移住が重要な問題になっています。移住が必要な家族は約一万人です。官僚主義が崩壊したあとの政府も移住問題について何の役にも立ちません。

私たちジャーナリストは数も少なく、この問題を書くことが大切だと思っています。力は小さいのですが、持てる力を発揮して、実現可能な移住問題に取り組んでいるところです。今までに入つ（？）の家を購入し、汚染地区からの移住を行うことができました。日本の皆さんのおかげで、つまりチェルノブイリ・九州、チェルノブイリ・中部の援助で一軒の移住者のための家を購入することができました。

二台のすばらしい医療機器を地区の病院に送っていただきありがとうございました。さらに、粉ミルクもいただきありがとうございました。（このふたつは昨年中部が送った救援物資のことです。）牛乳、乳製品はこちらでは放射能で汚染され、飲めません。汚染されていないミルクはとても大切です。乳幼児用の食品は売っていませんし、全くありません。日本からの輸入が必要でしょう。

最も重要な問題は汚染地区の住民のことです。汚染地区にはいまだに30万人

の人が住んでいます。その人たちには新鮮な汚染されていない食物の供給がまったくなされていません。汚染している食物をとればとるほど発病率は高くなります。したがって移住以外に解決の方法はありません。

チェルノブイリの悲劇の代価は高価なものです。いまだに30万人の人が汚染地区に住んでいます。放射能は3代にわたって影響を与えるでしょう。放射能による死亡は多くなるに違いありません。ある所の放射能の値は平常値の100倍あります。そこには子供が未だ住んでいるのです。最近、私はコロステンに行ってきました。そこには7万人が住んでいます。公園や広場には人が行き交い、子供が遊んでいます。そこは放射能の値が30ラドもあるのです。

家畜の例では4世代目か5世代目に奇形があらわれます。恐ろしいことです。人間でも4、5世代目に現われるでしょう。移住が早く進めばこの悲劇も少なくなるでしょう。

最後に、日本の皆さんにチェルノブイリの悲劇に関心を持っていただき感謝申し上げます。

もう一つ申し上げたいことがあります。ウクライナでもアメリカやヨーロッパでもチェルノブイリについて関心が大きくなることを期待しています。

第4曲 <エネルギー問題>曲

『8本足の子馬』

[ナレーション] 「1986年4月26日、ソビエトのチェルノブイリ原子力発電所が事故を起こした。吹き出した放射能は、数年のうちに多くの人々の命を奪った。奪ったのは人々の命だけではない。自然も動物たちの命もたちどころに奪ってしまった。・・・そしてそれから数年後、1頭の子馬が生まれようとしていた。母馬はもちろん、回りのすべてが希望に胸ふくらませて、この子馬の誕生を待った。・・・しかし・・・生まれてきた8本足の子馬は、とうとう立てないまま、悔しそうに大地にじつと目を向け、息を引き取ったという。

ふるさとの広い大地を 走れ！栗毛の子馬
咲く花はおまえの生命（いのち）をたたえ
吹く風はおまえの足元に
やさしくやさしく自由を纏う

ふるさとの緑の大地を 走れ！栗毛の子馬
春の光はたてがみを金色に染め
遙かな道はおまえのひづめの音に
美しい明日の歌を重ねる

走れ走れ子馬 ふるさとの大地をけて
走れ走れ子馬 憧れの世界へ

でも でも 8本足の子馬は立てない
あの広いふるさとの大地が走れない
希望さえなくした悲しみが
大きな障に溢れていた
母に聞く緑の草原は・ない・・・
母に聞く小鳥の歌は・ない・・・
母に聞くふるさと この大地が見たい

立て！走れ子馬 8本足の子馬よ
大地を強く蹴って飛び上がれ 空へ
立て！走れ子馬 8本足の子馬よ
空の上からいつも いななげ高く

ふるさとの朝の大地を 駆ける！栗毛の子馬
軽やかにひづめを鳴らし、たてがみをなびかせ
8本足の子馬よ おまえのふるさとを
愛する愛するふるさとをめざせ

玄海一号機・細管破断の危険性

運転再開は許されない！

昨年(1994年)の11月7日から第13回定期検査に入っていた玄海原発一号機(出力55万9千KW)の蒸気発生器細管で、新たに163本の損傷が見つかったことが1月10日明らかになりました。これで同一号機の損傷細管は計2352本。細管損傷率は34.7%となり、関西電力高浜二号機の41%に次ぐ国内ワースト2です。しかもキズがないのに(40%以下のキズは発見できない)予防的に補修を施す予防スリーブを含めると、その合計は3644本となり、全細管の53.8%となり、半数以上の細管がボロボロ、まさに日本で一番危ない原発なのです。

この細管損傷(粒界腐食)の原因について九電は、一次冷却水補助ボイラーの清缶剤(さびどめ)として80年5月まで使用していたリン酸ナトリウムより生成した水酸化ナトリウム等の遊離アルカリが、二次冷却水に混入。細管と管支持板のすき間(0.2mm)で、高温による沸騰凝縮現象のため「濃縮高アルカリ環境」が生成。これが粒界腐食割れの原因であるといっています。だからその対策は、清缶剤としてはヒドラジンをを用い、遊離アルカリの中和のためにホウ酸を注入しつづけるというものです。確かに第

九回定検時の466本をピークに年々減ってはきていますが、これを九電の言うように「中和のためのホウ酸注入が効果を表している」とただちに納得する訳にはいきません。なぜなら、運転当初からヒドラジンを使用しているはずの関西電力高浜二号、大飯一号でも粒界腐食が起きている事実は、腐食の原因そのものが「別の何か」であることを物語っているからです。

「別の何か」とは何か？。

たぶんそれは細管そのものに問題があるのではないのでしょうか。つまりは、その材質が腐食しやすく、壊れやすいのではないかと、ということです。だから、いよいよ切羽詰まって二年後の九四年には蒸気発生器そのものを取り替えると言いつ出したのではないのでしょうか。しかし、そんなボロボロの細管のまま、あと二年運転を続けようとしているのです。細管破断の危機が目前に迫っている。そんな気がします。

■ 美浜原発事故から一年。その教訓は何か？。

ちょうど一年前、関西電力美浜二号機で蒸気発生器細管が破断し、わが国で初めて緊急炉心冷却装置(ECCS)が作動するという重大事故が発生しました。この事故の原因について通産省は、最終報告のなかで、◆細管の最上部の振れ止め金具に施工ミス(設計どおりに付けられていなかった。)があった。◆その下部で振動を抑える第六管支持板と細管のすき間にサビによる詰まり(細管固定)が起きた。このため、異常振動が発生。

細管固定部分にフレッチング疲労による微細な亀裂ができ、やがてギロチン（輪切り）破断したと推定しています。

私たちは事故直後から、破断の原因を1987年の米国・ノースアンナ原発で起きた細管破断事故の例を上げながら「サビ」が原因ではないか。デンティング（つぶれ）現象が起きたのではないかと指摘してきました。この指摘には最後まで白を切り、「美浜二号機にデンティングは起こらなかった」と結論づけ、あくまでも「振れ止め金具不備」という美浜固有の問題として片付け、最も大事な問題である「サビ対策」を無視してしまったのです。何故なら、サビによる細管固定の問題は、1970年代に運転を開始した国内の旧式加圧水型原発のほとんどが抱える問題であるため、これを問題にすることは国や電力会社にとっては「致命傷」になるからです。

■ サビ・細管締め付けの危険性

通産省がまとめた美浜二号機事故の「最終報告書」の中で、支持板のサビのもたらす効果について、①、フレッチング疲労による微少亀裂、②、サビによる細管の締め付け（デンティング）、及び、③、腐食環境、によって細管の疲労強度が著しく低下することが、明らかにされています。（以下、美浜の会ニュースよりしばし引用。）

① フレッチング疲労による微少亀裂

フレッチング疲労とは、「ある物体が別の物体に接触し面圧を受けた状態で、

繰り返し荷重を受けると、接触部で相対すべりが生じ、通常疲労の場合より低い応力で微少亀裂を発生することによって破壊するモード」である。サビによる締め付けがあるもとの振動力が働くと、容易に亀裂が細管に入るのである。そしてその微少亀裂はサビによる細管の締め付けが強いほど発生しやすいと「最終報告」は述べている。

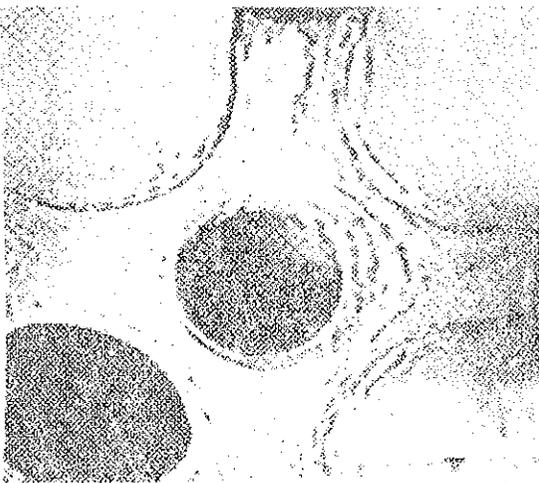
② デンティング

支持板（炭素鋼）や水あかから発生するサビの主成分は黒サビ（マグネタイト）である。このサビは非常に堅いのが特徴である。支持板が黒サビになると、その体積は二倍近くにもなるため、細管との間にあるすき間は目詰まりし、さらに細管を押し潰すほどの強い力が働く。この時、支持板の上端部にある細管表面には、ちょうど手首を締め付けた時と同様に、軸方向に引っ張ろうとする力が発生する。ところがこのような平均的な応力がかかると、細管の疲労強度は大きく低下することが「最終報告書」には明記されているのである。このような細管の変形は、デンティングと呼ばれており海外のプラントでは数多くの発生例があるが、通産省も関電もこれまで国内での発生例を否定してきた。しかし、関電の公表資料（昨年3月11日付け）によれば、破断した14列細管の支持板部高温側は0・3ミも変形していたとされている。また破断細管を引き抜くときには1トンの力（通常の10倍）が必要であったとも伝えられている。美浜二号機でもデンティングが細管破断に影響を与えたのは疑いな

いと思われる。デンティングが破断に及ぼす影響は大きく、米国・ノースアンナ原発では直径がわずか0・06ミリ変形したことが原因で破断した。

③ 腐食環境

「最終報告書」は美浜二号機の破断細管に対しては、腐食は影響しなかったとしているが、それを主張することによって、腐食環境が細管の疲労強度を低下させることを認めている。高浜二号機の支持板部が腐食環境であることは誰も否定できない。事実、粒界腐食割れが頻発し、既に53%もの細管が補修を受けているのである。ほとんど全ての細管支持板部にはひび割れが入っているだろう。腐食によるひび割れで細管が弱っているところに、サビによる締め付けの力がかかっているのである。支持板のサビがもたらす効果に複合する要因（美浜二号機にとっては「振れ止め金具不備」）が、高浜二号機の場合には腐食割れであるという見方も成り立つだろう……と。



ファイバースコープで映された美浜原発2号機の細管破断面（左下）とその周りの管支持板

こうして見てくると、玄海一号機の蒸気発生器細管がいかに危険な状況であるか改めて認識させられます。電力会社もこの事実を認めているがために、事故を起こした美浜二号機を初め、福井県にある関西電力大飯一号機、高浜二号機、そして玄海一号機については蒸気発生器そのものの交換を決定したのです。問題は、工事が始まるまでの二年間、ポロポロになった細管を接ぎあてしながらだましまし運転するという暴挙です。

蒸気発生器細管とは

ここで、蒸気発生器細管について少し復習してみます。日本の原発には九電などが使っている加圧水型原発と東電などが使っている沸騰水型原発の二種類があります。沸騰水型の特徴は原子炉の中で沸騰した蒸気が直接タービンを回し、蒸気は復水器を通して再び原子炉の中に戻される比較的簡単な構造になっていますが、放射能を含んだ蒸気が直接タービンを回すため、環境中に放射能が漏れやすいという欠点があります。一方、加圧水型の特徴は、原子炉から送り出された一次冷却水（約220℃、157気圧）が蒸気発生器の中にある細管（内径約2ミリ、肉厚約1ミリ、長さ20センチ、一基あたり約3000本）を通る間に、細管の外側を流れる二次冷却水（約220℃、50気圧）に熱を伝え沸騰させ、タービンを回すという仕組みになっています。これだと一次系の水が直接環境に漏れるという心配は少なくなりますが、その分「蒸気発生器細管」というアキレスけんを抱え

ることになる訳です。細管は効率よく熱を伝えなければ意味がありません。そのために1ミリの薄い壁で100気圧の圧力差と100℃の温度差に耐えることが要求される訳です。ここに細管問題の全てがあります。

■ 玄海一号機、細管破断の危険性

これまで、細管問題は粒界腐食だけが問題にされてきました。この事自体はきわめて重要な問題なのですが、美浜原発事故はそれに加えて、「サビ」の問題を新たに私たちに突き付けてきたのです。金属ならば避けて通ることができないこの問題が、細管破断のカギを握っているかも知れません。

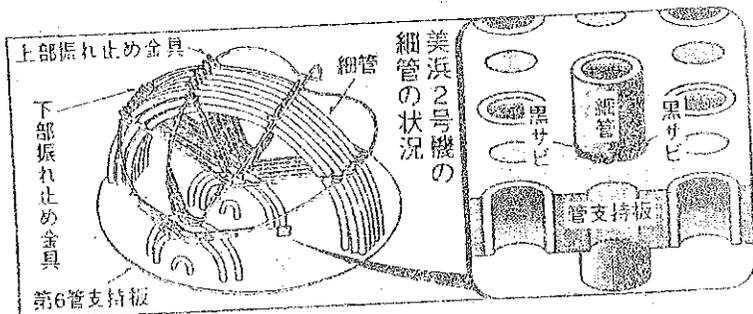
細管にキズがあるかどうかは、「渦電流探傷検査」という方法で調べます。細管の一本一本に「うず電流」を流して電流がキズに触れると分かるようになっていくわけです。ところが、この検査だとキズが440以下だと検出できません。電流が素通りしてしまうのです。また、下の方からうずのように電流が流れていきますから縦のキズは発見できますが、横割れのキズは発見できません。事実、88年10月に起きた大飯原発一号機での細管損傷事故は日本で初めての「横割れ」事故でしたが、定期検査では何も発見できませんでした。細管にできたニヶ所のピンホールから一次冷却水が漏れだし、手動で原子炉を止め調べたところ、横割れが見つかったというものです。内側の亀裂は半

分に達しており、まさに破断寸前で止まった事故だったわけです。

細管の外側でできるサビなど検査のしようもありません。そのためにこれまでは定期検査の対象にもなっていないのです。細管と支持板のすき間が完全に詰まっている場合には、振動検査でかろうじて見つけられるそうですが、それ以外は調べようもないのです。

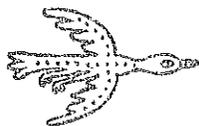
昨年11月2日、細管損傷率ワースト1の高浜2号機で41本の細管をチェックしたところ、最上部の支持板部で0・2ミリのすき間がサビで詰まり固定状態になっていることが明らかにされました。閉電では、全ての細管が同じ状態になっていることを認めながら、「振れ止め金具が正常に取り付けられていれば問題ない」と運転再開を強行しました。

閉電が高浜2号機の全ての細管がサビで覆われていることを認めたということは、当然玄海一号機も同じ状況にあると言えます。米国・ノースアンナ原発で、直径が僅か0・06ミリ変形したことが破断の原因になったことを考えれば、玄海一号機の運転再開を許すことはきません。しかもノースアンナでは、振れ止め金具が設計どおり装着してあったうえでの破断です。玄海一号機細管破断はそこまできています。(深江)



【登場する人々】 ローマ法王 / マザー・テレサ / ゴルバチョフ大統領 / ワレンチン・ラスプーチン(作家) / マリーヤ・プリマチエンコ(画家) そして、被曝した子供たち

Приближение к Апокалипсису Чернобыль рядом



「あれから5年。

チェルノブイリの子供たちに

5回目の春は訪れるのか…」



映画は16ミリです。4月5日から19日までの間九州で借りています。費用については別途相談しますが、チケットの料金は千円ということをお願いしたいと思えます。映画の料金としては500円として、半分は医療援助のためのカンパということ考えています。

上映会を計画したいという所は、日程の調整等ありますので今月いっぱいまでに連絡をお願いします。

チェルノブイリ黙示録

Приближение к Апокалипсису Чернобыль рядом



◎1986年4月26日

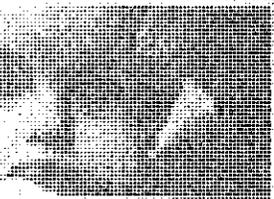
その日、メーデーを控えたソビエトの人々は、一年中で最も快適な季節を迎えようとしていた。長い冬が終わり、暖かな陽光が輝き始める。ちょうどその頃、モスクワの南、チェルノブイリでは放射能が人々に降りかかっていた――。

◎あれから5年

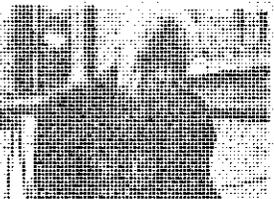


ソビエト政府の公式発表では、事故による死者は、事故処理作業に当たった31名だという。しかし、その後、甲状腺癌、白血病などによる死者の数は途方もない数字になっている。その症状は、事故当時、母親の胎内にいた子供たち、被爆(曝)した母親から事故後に生まれた子供たちにまで及んでいる。

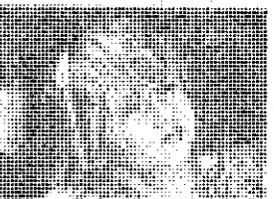
◎いま「黙示録」へ



1987年2月、モスクワで国際フォーラム「核のない世界のために、人類の生存のために」が開かれ、チェルノブイリ事故を扱った二本のドキュメンタリー映画『チェルノブイリ・クライシス(原題「警告」)』『チェルノブイリ・シンドローム(原題「チェルノブイリの鐘」)』が上映された。二本とも事故直後から現地で取材したドキュメンタリーで、国際フォーラムで初めて公開された。その後、日本を含む各国で公開され、国際的にも高く評価された。



『チェルノブイリ・クライシス』の監督は、放射能障害で死亡し、残り二人の撮影スタッフも入院せざるを得なくなった。幸いにも、『チェルノブイリ・シンドローム』のロラン・セルギエンコ監督とその撮影スタッフは、生命をとりとめ、新たに撮影を続けた。



それが、『チェルノブイリ黙示録』である。セルギエンコ監督は、事故の真相を知らないまま危険な作業に従った人々のその後の運命や、事故の責任を問われて刑に服している人々たち、放射能障害に苦しむ子供たち、為す術のない母親たちの苦悩の表情……を記録している。また、環境保護の運動をしている人々の話や、日本の原発(89年来日)など、多角的な取材を展開している。あまりに鋭く事故の責任を追求しているために、一部では高く評価されているが、いまだにソビエト国内では公開されていない。

監督-ロラン・セルギエンコ

撮影-コンスタンチン・ドウルノフ 朗読-ニコライ・グベンコ(原文化大田) 録音-ミハイル・ガバエーエフ 編集-リュドミラ・アレクセエーン エレオノーラ・アレクセエーン
1990年 日本ソビエト映画ドキュメンタリー カラー 35mm 61分 STUDIO NERV製作 配給(株)フリップ

鹿児島県が昨年「原子力の日」にあたる10月26日付け朝刊2紙（南日本新聞と鹿児島新報）に原発広告を掲載した問題で、地元鹿児島の脱原発グループや個人（96人）が県知事に対して「県費の支出（約150万円）は不当であり、修正広告を出すように」と監査請求を行いました。意見陳述会は1月13日、14日、鹿児島市と屋久島の2会場で行われています。たくさんの方が意見を述べられました。その中から鹿児島の丸山さん、屋久島の星川さんの分を紹介します。

1991年10月26日に鹿児島県が南日本新聞と鹿児島新報に掲載した広告について私は次のように考えています。

広告を読んでみる限り、県が県民に知らせたいと思っているらしいことは、およそ三つあるように思われます。

その一つは、10月26日は誰がどのような経緯で決めたのかは知りませんが、「原子力の日」という日らしいこと、二つ目は、原子力は発電ばかりではなく医療などにも役立っていること、三つ目は、自然界には自然放射線と人工放射線とがあるが、原子力発電所から出る放射線量は、ごくわずかであり、したがって原子力発電の安全性に問題はないということです。

もしこの広告が九州電力によるものであるなら、原発を推進していく立場上、一民間企業としては自らの事業を正当化し、原発の安全性を強調したいという気持ちからしたものではないと理解できません。

しかしながら、一民間企業とは全く別の地方自治体である鹿児島県が、民間企業とまちがえるようなあの広告を県民の大切な税金を使って商業新聞に出す必要がどこにあるのでしょうか。10月26日が原子力の日だということを大金を使って県民におざわざ知らせる必要がどこにあるのでしょうか。この日を宣伝するのなら、耳の日、鼻の日、目の日、バレンタインデー等の日を宣伝しないのはなぜでしょうか。県民は10月26日が何の日かを知りたがっているという調査結果でもあるのでしょうか。

また、原子力が発電だけではなくて医療などにも役に立っていることなど現在

原発広告に監査請求

鹿児島県の「県費支出は不当」

鹿児島県が「原子力の日」にあたる十月二十六日に地元新聞二紙に掲載した原子力に関する広告は「不
鹿島市の脱原発グループの
正確な知識にもとづき県民
に原発の安全を印象づける
もので不当」として、鹿児島
市内の脱原発グループの
メンバーら六十一人が十六
日、広告掲載への公費支出
について住民監査請求をし
た。 広告には県が百三十六万二
千四百三十三円を一般参計
から支出して地元の南日本
新聞と鹿児島新報の朝刊に

では、小学生でさえ知っている事実であります。こんなわかりきったことまで税金を使ってふれてまわる必要がどこにあるのでしょうか。これでは税金の無駄使いです。この広告に関係した県の担当者の皆さんは、鹿児島県民の原子力についての知識水準が、小学生以下だとでも考えておられるのでしょうか。この点でも私は理解に苦しみます。

また、県は原子力発電所から出る放射線の量は、自然放射線の量に比べて、ごくわずかだと書いています。しかし、この記述には重大な欠陥（けっかん）、偏（かたよ）りがあり、ここにこの広告は不当だと私が考える最大の理由があります。

すなわち、このようなことが言えるのは、あくまでも原子力発電所が正常に運転され続けた場合のことであって、一たび大事故が起こればどうなるかについて一言も触れられておらず、したがって、私も含めて原子力、放射能、放射線といったむずかしいことについて、必ずしも高度な知識をもっているとは言い難い県民の多くに、原子力発電は安全なものだという必ずしも正しくない認識を与えるおそれがあります。

したがって、公的機関である県がする広告としては不備、不当な広告であると私は考えます。もちろん、私は原発に従事している人や、それを監督する立場にある人々が、原発の事故が起これぬよう努力しているに違いないことは認めます。しかしながら、原発に事故の危険性がつきまとうという事実を県民に知らせようとしないうような広告は、自治体が行うものとしては、国民の、県民の知る権

利を満たさず、不当なものだと考えます。

広告文の最後の部分、つまり県では、川内原子力発電所周辺の環境放射線を監視しているという内容は、単に事実を表現しているだけであって、上に述べた通りの県民の知る権利を満たすものではありません。

人間は最も重大で深刻な問題、例えば少し前の東西冷戦の時代ならば、核戦争が起こるかもしれないといった問題は考えたがらないものです。しかし、これは個人に限った場合であって、県の政治といったような場合、話は別です。県内に原発をかかえる鹿児島県がこれについて最も考えなければならないことは言うまでもなくその事故の問題です。それにもかかわらず、事故が起こるかもしれないことに触れていない広告は、県がするものである以上、不当です。

次に、広告には放射線は、大昔からあったとあります。確かにその通りでしょう。しかし、その大昔という長い時間を経たおかげで人体に危険な放射線の量も強さも弱まり、ようやく地球に人類が住めるようになったのです。そういう不合理な面をもち、また、事故の危険性があるにもかかわらず、それを無視し、ひたすら原発が安全なものだという印象を県民に植え込もうとするようなこの広告は不当です。

それに、この広告が言う通り、原発から出る人工放射線が人間に対する安全性について何ら取るに足る量ではなく問題がないのなら、県がもっている原子力安全対策室など無用の長物ではありませんか。そんな対策室など、即廃止してしまった方が、余分な金を使わないで済むと

いう点で県民のためになるものと思われ
ます。もしそれができないというのなら、
それこそ原発が危険なものであることを
証明するものであり、知らせるべきこと
を知らせようとしないこの広告のいい加
減さを示すものであると私は考えます。

1992年 1月13日 丸山 隆雄

■ 原発広告……私たちの意見

原発は安全ではありません。全生命史
はいうまでもなく、人類史から見てもほ
んの一瞬でしかない核開発以後の半世紀
に、どれだけの事故と汚染と被曝をもた
らしたでしょう。その被害はいまなお、
ウラン採掘地で輸送経路ぞいに、そして
稼働にともない補修・清掃・点検を請け
負う労働者たちに、日々広がっています。
そして、万一大事故になれば地球規模の
広域汚染が待ち受けていることは、チェ
ルノブイリが実証しました。通常運転に
よる放射能放出が自然放射線と比べて問
題ないという説明は、地球上の生物が本
来の自然放射線レベルにようやく適応し
て進化してきた事実をおおい隠す詭弁で
す。自然放射線「プラス」核利用による
人工放射線の相乗作用について、私たち
は全く無知であることを忘れてはなりま
せん。むしろ、原爆の発明以来、全世界
的に急増しているガンなどはこの相乗作
用の影響とみて、自然放射線レベルまで
環境被曝を抑えることをめざすべきなの
です。

地方自治体が国民や県民の税金を使っ
て原発推進の宣伝をすることは、戦前の
大政翼賛と同じ判断停止症状です。原発
広告は今回かぎりやめ、これからはぜ
ひバランスのとれたエネルギー政策と広
報活動を心がけてください。その手始め
として、今回の広告と同じ費用・スパー
スを使って、原発の危険性を訴える広告
を出すことを提案します。

星川 淳・加代子

◆-----◆-----◆-----◆-----◆

チェルノブイリに行って以来、毎回の
ように活動報告を送ってきてくれる別府
の河野さんより、今回も報告記事が送っ
てきました。か細い体ながら、最近では
すっかり「語り部」としての貫禄もでて
きたとか。3月、4月もビッグ企画が予
定されており、次回の報告も楽しみなど
ころです。

「小出さんをひとぼん中眠らせない会」

を終えて……。

河野近子

昨年11月27日に、京大原子炉実験
所の小出裕章さんを迎えて、湯布院で原
発問題の一泊研修会を開きました。もと
もこの研修会は単独で企画したもので
はありません。大分の原水禁で内部の原

発学習会を開きたいとの意向があり、小出さんをお招きすることに決まりましたので、せっかく遠路おいで頂くのに一度の講演会だけではもったいないということで、これに便乗する形で市民運動の一泊研修会を同時企画したものでした。

ところが、その後日出生台での日米合同演習反対運動が入り、最終的には11月末の原水禁主催講演会は開催が不可能という事態に追い込まれてしまいました。すでに小出さんの日程は押さえてあるし（実は最初10月初旬という予定でお願いしてあったのを、日出生台の件で一度延期していたのです）、一泊研修会の声かけも方々に済ませた後でしたので、どうしたものかと悩んだ挙げ句、急遽予定を変更して市民シンポジウムとのドッキングということにしました。

市民シンポジウムは、このごろとみに危険性がクローズアップされている学校でのレントゲン検診とインフルエンザの問題を取り上げることにし、短期間の内にバタバタと計画を進めました。その間の内部エピソードを一つ。

原発学習会ということで講演をお願いしてあったのを、急遽「学校でのレントゲン検診を問う」というテーマに変更し、こちらの独断で決定した後小出さんに事後承諾の形をとったのですが（そのあたりの内容も充分把握しておられると思ひ違いをしていたのです）、お電話でそのことをお伝えした時、電話の向こうで一瞬絶句してしまわれました。当日まで時間があまり無いし、他にも多くのお仕事を抱えておられる状況にあつて、データ集め等その為の準備をする時間がとても取れそうにないからその役は担えないと

云われるのです。今度はこちらが絶句する番でした。というのも、他の二人のパネラーも決定し大筋も決まった後でしたので、ここで小出さんにけられたら、その全てを白紙に戻して一から計画を練り直さなければならない状況にあったからです。時間的余裕がほとんど無い時点で、それはまず不可能なことだったので。

そのあたりの事情をお話しし、無理矢理承知して頂きました。最近は大変多忙な毎日をお過ごしで過労気味なことを充分知っていながら、それに上乘せするようなひどい要求をしてしまいました。今思うとずいぶんと失礼で強引なことをしてしまったと本当に申し訳なくて合わせる顔も無いのですが……。

“無理させて 無理をするなど 無理を云い”という川柳を書いてこられながらも、相当な無理をして、シンポ当日にはきっちりポイントを押さえた完璧な講義をして下さいました。

疲労が蓄積しておられるまま大分におこし頂き、27日の一泊研修会では明け方まで交流会が続きましたので、28日のシンポ当日、途中で体調が悪くなって講義が中断されるという事態になり、無理をさせた張本人としては、申し訳なくて青くなってしまいました。それでなくても以前から「九州の人間は人使いが荒い」と云われていたので、「こんなにこき使われるのならもう二度と大分へはいかないゾ」と思われているのではないかと心配しているところです。もっとも、交流会の時は「早く寝て下さい」と再三勧めたのに居続けたご本人にも半分責任があるのですが……。

一泊研修会は、湯布院の「山荘四季」を会場に開催しました。薪ストーブで暖をとる山小屋風の素敵な山荘でした。県内各地と遠く宮崎県延岡市より20名の参加者が集まり、じっくりと講義を受けることができました。当初のテーマとしては、

- ◎美浜事故について
- ◎原発立地の手法や反対運動のあり方
- ◎伊方原発海底土の汚染調査について
- ◎核融合の内容とその可能性について
- ◎もんじゅ、ふげんと軽水炉の違いについて

等を考えていたのですが、実質PM5時から夕食をはさんで10時までの短い時間だった為、美浜事故だけで時間を使い果たしてしまい、結果的には他のテーマには全く入ることができませんでした。これからは時間設定にもう少し考慮をする必要がありそうです。

OHPを使って詳しい説明をして頂きながら、それぞれが分からない時はいつでも質問するという方法で進めましたので、途中話が脱線したり、一つの部分に時間をくったりしながら、ゆっくりしたペースで講義をして下さいました。一方的な講演会と違い、自分の知りたかった部分をその都度詳しく押さえてもらいながらの研修でしたので、参加者にも意義が深かったものと思われます。

このような学習会が定期的に組まれば、私達の知識もより確実なものになってくるものと思います。月に一度位のペースでやれば最高なのですが、九州内に専門家のいない実情ではとてもむずかしいことでしょうから、せめて年一回位はやりたいものです。

PM10時から町内の温泉にみんなで出かけ、露天風呂の味をじっくり味わうことが出来ました。その後11時から遅い交流会の時間となり、延々明け方4時30分まで続けました。宇佐の姫野さんが自作自演のフォークをギター片手に次々と披露してくれ、その場の雰囲気を一気に盛り上げてくれました。原発の歌、環境の歌、校則の歌……と、

今の時代が抱える問題をたくみに折り込んでの熱唱にヤンヤの喝采が起こり、アンコールの拍手が鳴り止まず、一時期彼の独壇場となりました。(皆さんの会でも是非是非声をかけて下さい。時間の許す限りどこにでも出かけるはずです)

その後もアルコール片手の交流会は続き、最後の人が布団に入ったのはAM4時30分を回っていたという次第です。思いを同じくする人達の集まりでは、肴は粗雑でも、心が温まる分だけアルコールの味が良くなるものと思われます。又機会があればこのような研修会を組みたいものと思っております。



◎「ブルガリア国歌」を最近、小さな原発事故が起きたばかりに住民は日ゴスロイの家を閉め切り、通りから人が殆ど無くなった。

出を控えて国家元首の指示を待
てて放送、五十分後に「フ
リスマス」ジョークを「訂正
した」が同時に「地元の住
民はパニックに陥った。
◎：放送の教団後に技術者は
制御室に駆け込み、職員も慌
たてで出勤する等と原発内は大
ロイター共同

日本経済新聞

91.12.24

高浜原発の2号機細管

支持板サビ詰まり

十月末に起動した箱井原
高浜町、関西電力高浜原発
2号機（加圧水型軽水炉、
八十一万六千キロワットの細管
の支持板の間がサビなどで
腐食してすき間が詰まって
いることが二日、関西電力
から京都府への報告でわか
った。二月に起きた関西電
力美浜原発2号機の蒸気発
生器細管破断事故は振れ止
め金具の差し込み不足に加
え、細管と管支持板の間
にサビなどが詰まってい

たことが原因とみられて
いる。
高浜2号機は三月、振れ
止め金具の取り付けミスが
見つかり、関電は定期検査
を繰り上げて実施。金具を
改良型に交換し、十月二十
七日から炉を起動した。

最上部の支持板部で〇・二
ミリのすき間がサビなどで詰
まり、固定状態になっていた
のを確認した。
関電では、ほとんどの細
管が同じ状態になっている
と説明。通産省も今回の高
浜原発の起動に「問題はな
い」としている。

報告によると、定期検査
の中でサビの有無を調査
し、一万箇六十四本ある細
管のうち、金具取り付けミ
スのあった周辺に細管四十
一本を手チェック。この結果、

九州電力は十日、定期検査
中の玄海原子力発電所1
号機（佐賀県東松浦郡玄海
町、加圧水型軽水炉、出力
五千九百九十キロワットの蒸気

発生器で、新たに百六十三
本の損傷細管が見つかった
ことを明らかにした。これ
で同一号機の損傷細管は計
二千三百五十二本。未損傷

細管の予防スリプを含め
た損傷細管は三千六百四十
四本となり、全細管の五三
・八割と初めて過半数に達
した。

損傷の原因は、これまで
と同じ運転初期の補助ボイ
ラーのさび止めに使した
リン酸ナトリウムが金属面
に付着して起きる粒界腐食

報 日 新 聞

92. 1. 11

割れ、損傷部分もこれまで
同様、同発生器下部の管板
と細管を支える管支持板
部分。細管損傷率は三四
・七割となり、関西電力高
浜原発2号機の四一〇分
次に国内ワーストとな
った。

損傷細管百六十三本のう
ち、百二十三本は金属のサ
ビを細管内部に入れるスリ
プ補修を実施。残る四十
本は補修機器が届かな
い範囲にあるため金属の
検査をする。また、過去に
検査をした細管のうち百本の
検査抜き、スリプ補修を
して再利用する。再利用細
管は合計二百五十本になっ
た。

九電は九四年を目標に、
同一号機の蒸気発生器を交
換する予定、現在、国内で
安全審査中。
しかし、同県唐津市の主
民団体とも連絡を取り、
対応を講じたい」としてい
る。

玄海原発

措置細管

半数超す

新たに国内ワースト2に
103本損傷